猫蓑通信

第105号
第106号
合併特大号
平成29年
（2017年）
1月15日発行
（年4回発行）

連句日和

青木秀樹

亡くなられた近松寿子氏（元連句協会副会長）が、晴れた日も雨の日も、そして暑い日も寒い日も「連句日和」と挨拶されたことは有名でした。連句入門書をお書きになっている彼女にとって、どんな日も連句には最適だったということでしょう。

昨年秋、全国規模での連句大会が目白押しでした。日本連句協会千葉県支部主催の連句大会（八月二十一日）を皮切りに、国民文化祭ならプレ大会（十月一日）、浪速の芭蕉祭（十月九日）、伊賀上野での芭蕉祭とふるさと連句大会（十月十二日）、国民文化祭あいち（十月三十日）と続き、更にさきたま連句大会、俳諧時雨忌（いずれも十一月二十七日）が続きました。

各地の連句大会で猫蓑会会員が受賞されることは東明雅先生の教えが間違っていないとして喜ばしいことです。それに加えて猫蓑会会員が各地の連句大会に参加し、捌き手として、あるいは連衆として、活躍している様を見ることをうれしく思います。各地の人々と座をともにすることによって得られるものは、想像以上に大きなものです。

連句復興期に活躍された先人たちは、それこそ「死にもの狂い」で連句文芸の活性化に努められました。各地での連句大会の開催、捌き手の育成、応募者の励みになる授賞制度など、よいと思うことは何でもするあり様でした。これにより連句人口が増えたことは事実でしょう。

私たち猫蓑会の母体は朝日カルチャーセンターの「連句入門講座」出身者でした。その中で連句に面白さを感じている方々が中核となりました。明雅先生はカルチャーセンターでの教室以外にも、連句に関心を持つ人々に、より連句が好きになるように教育を施しました。その要点は発想の自由と、付け転じ、特に決して後戻りしないように注意されたように思います。また、早期に捌き手の経験をさせたのも猫蓑会の特徴でした。捌きをすると連衆の考えていることを逆の側からみられること、捌き手として知るべきことがいかに多いかを知ることの効果を考えられたからでしょう。

私が「楽しくなければ連句じゃない」と言っているのは連句の基本的特性である集団制作、捌き手と連衆が共同してひとつの作品を作ることに楽しさを見出すことが、連句人口を増やすために先ずすべきことと考えた結果です。芭蕉や明雅先生の晩年の作品をみると、そのほとんどが、捌き手のある膝送り方式で巻かれています。連句の楽しさを参加者全員で分ち合おうとする意志が感じられます。私はその後「楽しいだけじゃ連句じゃない」を付け加えていますが、それは連句の付け運びに注力することと、校合の大切さを言ったものです。

いま各地の連句大会が活況であるとは言え、連句界は高齢化が進んでいます。指導者の老齢化により個々の連句会の解散が後を絶ちません。日本の伝統文芸である連句を担う人々に、連句の楽しさをいかに伝えてゆくか、みなさまのお智恵を拝借したいと思います。日本連句協会だけでなく、猫蓑会にとっても緊急の課題と言えるでしょう。

●目次●

第百三十九回猫蓑会例会作品　源心八巻　2
平成二十八年俳諧芭蕉忌　正式俳諧二十韻　5
近・現代の連句界と連句誌（上）　東明雅　6
第百三十八回猫蓑会例会作品　歌仙八巻　10
第二十六回猫蓑同人会作品　歌仙六巻　14
「明雅先生の古典籍」幻視　鈴木千恵子　17
第三十一回国民文化祭あいち２０１６連句部門
文部科学大臣賞　歌仙「星宿を」　鈴木了斎　捌　18
名古屋市長賞　歌仙「北斎の龍」　石川葵　捌　18
愛知県連句協会会長賞　歌仙「レントゲン」　石川葵　捌　19
事務局だより　20

第百三十九回例会明雅忌興行　1～5

勝閨橋の座

源心「政子石」　本屋良子　捌

故人と曾遊の鎌倉にて
秋うらら八幡宮の政子石　良子
けふの記念（かたみ）に拾ふもみぢ葉　弘子
後の月きらめく川に舟出して　了斎
飴玉ひとつ左ポケット　路子
ウ やつてきた曲馬団小屋満員に　文伸
見た顔と遭ふ凩の道　斎
ハグしたら君の背中は火事だつた　路
心模様の赤と黒描く　斎
文豪は昔も今も破滅型　弘
柱時計が零時打つ音　伸
屋根裏でネズミが靴を作るらし　弘
思ひもかけず幸運を得て　路
拍手浴び花の決戦始球式　伸
東風の強さを測る若者　斎
ナオ 喜寿過ぎて父の育てし三宝柑　弘
Mが理想でLが現実　伸
納戸には怪しき器具が山になり　斎
夜の来るのが怖いうれしい　仝
吾に似ぬ嬰だけれども信じよう　路
染色体の美しき色　伸
不思議なる国をアリスのさ迷うて　弘
祭太鼓を一心に打つ　仝
盃に夏月受けてむしやんよき　路
路面電車の走る街角　伸
ナウ 浅草に十二階ある頃の俺　斎
不良老年団がたむろす　仝
先師より恋の句習ふ花の下　良
おぼろおぼろに暮るる色町　路

連衆　松原弘子　鈴木了斎　倉本路子
若林文伸

相生橋の座

源心「師憶へば」　橘文子　捌

師憶へば師の声運ぶ秋の風　文子
名残の月に心澄みゆく　昭
芋煮会Uターンの子集ひ来て　淳子
河原に雀巨大クレーン　俊子
ウ 様々な相談を聴く長火鉢　秀夫
よく似合ふよと羽織褒めやり　淳
役者なら芸のこやしと言訳も　夫
増える一方女弁護士　俊
築地から豊洲へ続く曲り道　夫
バッハのフーガ響く教会　俊
コイントス左の靴にしまひ込み　淳
遺言書また書き直さうか　仝
花明り漆の手筥煌めいて　俊
遠足の子の賑やかな列　昭
ナオ ひたすらに耕しの人山仰ぐ　仝
隣家の庭の猫を呼び寄す　俊
錠剤の色とりどりを掌に　淳
定年間近事なかれ主義　昭
御法度と言はれて恋はなほ熱く　夫
夕立の中固く抱き締め　淳
夏霜に濡れつつふたりエーゲ海　夫
難民申請揺れるEU　仝
新発意の経読む調べとぎれがち　淳
醒めて淋しい当選の夢　俊
ナウ 二十才から晴れて仲間と屠蘇を汲む　淳
揃ひの帽子ロゴも改め　俊
某所此処の花を求めて小さき旅　淳
平積みの本買うてうららか　仝

連衆　松原昭　上月淳子　三木俊子
田中秀夫

永代橋の座

源心「吾亦紅」　鈴木千惠子　捌

俳諧の道綿々と吾亦紅　千惠子
遥か彼方を仰ぎ見る月　正夫
鳴き交はす牡鹿牝鹿の会ふならん　豊美
高校生に人気クレープ　有子
ウ 新調のアロハシャツ着て港へと　夫
あんたあの娘の何と聞かれる　千
金吉は奥手の恋のただ一途　有
つひにかなはぬ心中の夢　美
神童の末は博士かパイロット　千
ノーベル賞をディラン受けるか　夫
予想紙と煮込み肴に馬談議　美
革靴だけが妙にぴかぴか　有
名城の初花を訪ふバスの旅　千
時代劇観て桜餅食ふ　夫

ナオ「春の海」CM曲に流されて　有
　お引越なら当店へぜひ　美
画集繰る書斎のソファー猫は膝　夫
　蝙蝠の飛ぶけふの吉兆　千
よく冷えた炭酸水をまづ一杯　美
　平凡でない愛のことばを　有
若妻は社交上手で我オタク　夫
　フィギュア並べて撫で回す日々　千
氷点下二十度月は近くあり　有
　凍蝶ひそと羽を開きぬ　美
ナウ光背を負へる仏に額づきて　千
　合唱組曲励むレッスン　夫
南総の伝奇を語る花大樹　美
　幼馴染が山葵田を継ぐ　有

連衆　國司正夫　髙橋豊美　佐々木有子

清洲橋の座

源心「歌膝」　西田一枝　捌

白髯の御前歌膝秋麗　一枝
　栗名月に届く吟声　久美子
あかとんぼお宿はこちらこの枝に　徹心
　小舟にゆられゆつたりと行く　碧
ウともがらと間近に仰ぐ夏の富士　久
　野外演奏マイク林立　枝
朝までも騒ぐ面々茶髪ども　碧
　弾みで触れて走る電流　心
年上の女に恋する物語　枝
　同棲結婚どちらでも良し　久
軽トラに積んだ荷物は本ばかり　心
　断捨離といふ捨てる苦しみ　久
散らんとてはりつめた空花宇宙　碧
　飽かず眺める春濤のきら　枝
ナオ鳥の絵にかこまれ囀り降つて来る　碧
　枯山水を女王凝視す　心
じりじりと右肩下がりわが経済　枝
　麦酒無理強ひされて危うし　久
見栄張らずエスカレーター捜しゐる　心
　振り逃げ三振掴みたる恋　碧
浮気虫釣つたそばから次の釣　久
　神も仏もちやんと見てゐる　枝
冬の月途切れ途切れに浪花節　心
　おでんぐつぐつ煮ゆるころあひ　久
ナウおぢいちやん新聞大好き大あぐら　碧
　公衆電話見えぬ街角　枝
植ゑ継ぎて江戸より続く花名所　久
　風やはらかに服をなびかせ　心

連衆　副島久美子　佐藤徹心　松本碧

駒形橋の座

源心「笑み湛へ」　青木秀樹　捌

笑み湛へ叱る師のあり新走　秀樹
　田舎料理の味の身に入む　久美
月中天ビルの谷間を照らしゐて　遊民
　ひよいと横切る痩せた黒猫　富子
ウ冬ざれの大川端を俥曳き　霞
　あなたにつくす指の輝　樹
いつかしら重き座となる山の神　美
　金のわらぢで招かれし頃　民
ボブディラン世界を沸かすノーベル賞　富
　趣くままの風に吹かれて　霞
草原に石油の井戸のうち並び　樹
　孫に絵本を読み聞かす椅子　美
ご無沙汰を詫びて一筆花便り　富
　殿様蛙無住寺の奥　民
ナオ遠足の小さきリュックと赤い靴　霞
　港の見える丘に佇む　樹
文机に三角定規入れにくい　美
　バベルの塔は夢の彼方に　民
手離さぬポケモンGOと歩数計　富
　寒いと言ふも老いの始まり　樹
抱かれて雪の静寂に溶けてゆく　霞
　どうともなれと邪な恋　霞
波乗りは月の飛沫を浴びながら　霞
　サルサを踊る汗の裏町　民
ナウ米国とキューバの和解すすみをり　富
　なぜそこにある地下室の謎　樹
花の果辿り行かなむゆるゆると　美
　春のショールが滑る肩先　民

連衆　斎藤久美　内田遊民　名古屋富子
　高塚　霞

平成二十八年十月十九日
於　江東区芭蕉記念館

第百三十九回例会明雅忌興行 6～8

吾妻橋の座

源心「一片の菊」　坂本孝子　捌

一片の菊を白磁の盃にこそ　孝子
夕月明かし東の山　郁子
鯊釣の釣果おもたく帰るらん　雅子
ベルを鳴らして過ぎる自転車　鄭和
ウ アリーナのブレークダンス汗しとど　ひろみ
はちきれさうな娘十八　雅
妄想の世界に住んでゐる漢　和
教会の鐘遠く響ける　郁
いつの日か戦禍止む日を信じつつ　雅
軒の氷柱をぽつきりと折り　み
朽野の土蒐(あつ)めては新薬を　和
入り組んでゐる地図にない道　み
千年の幹の形相花大樹　雅
朧の庭に灯すぼんぼり　和
ナオ 川筋の紺屋忙しく弥生尽　郁
引越便のトラックが着く　雅
腹の虫鳴く昼時のカレーの香　和
心電図には異常なかりき　み
見かけより傷つきやすい大男　仝
閨に優しくほどく細紐　和
木の葉舞ふ娑婆に寄せ合ふ肩と肩　仝
いづれ五輪がやつて来る街　雅
氷やの旗が月下に人を呼び　み
見上げてご覧夏の星座を　孝
ナウ 今もなほ心安らぐ彼の夢　郁
裏の広場でボール蹴る子等　仝
花筵町内会は総出にて　和
ぴつたりと合ふ春の帳尻　雅

連衆　東郁子　武井雅子　髙山鄭和
江津ひろみ

言問橋の座

源心「面影に」　松島アンズ　捌

面影に秋明菊の白さかな　アンズ
物の音澄みて上りくる月　泉子
鳥渡る湖に小舟をこぎ出して　蕉肝
走り書きする水茎の跡　健
ウ ジャンパーの内ポケットにチョコが溶け　蓉子
こたつの好きな仏蘭西の画家　肝
合の手をしつぽり入れて端歌など　健
グラス一杯ほどの愛しさ　泉
青年のこころたゆたふ坂の上　蓉
高層群のかなた富士の嶺　ア
名所図会遠近法が利いてゐる　泉
競歩選手の腰の揺れ方　健
西からと思へば東　花便り　肝
吹けば光にシャボン玉飛ぶ　健
ナオ クレソンに不老の塩をかけ召され　肝
菜根譚は父のお得意　蓉
自分史に書きたい人の多すぎて　泉
まだ決められぬ己が俳号　蓉
大統領レースは誰も笑ふらん　肝
広場に一基残るおみ輿　仝
湯帰りを流し目で見る夏の月　健
着衣のマハも裸のマハも　泉
気持だけ年末賞与出るらしい　蓉
第九で歌ふ般若心経　肝
ナウ ダライラマ祖国を守るメッセージ　泉
コントレールの伸びてゆく空　ア
けふの花昭和平成夢のごと　蓉
春うららけく喜寿の微酔　健

連衆　青木泉子　近藤蕉肝　由井健
五味蓉子

白鬚橋の座

源心「鬚風を」の巻　林転石　捌

鬚風を吹いて浩然秋をゆく　転石
山頂に座す大き弦月　吉文
赤い羽根女子高生がかけ寄つて　敦子
駅前広場声の賑はひ　佐紀子
ウ お好みで今年流行のジャケットを　敦
寒がりの彼すぼめてる肩　吉
愛ちやんは指輪を見せて嬉しげに　仝
火鍋ふうふうああんしなさい　石
情熱のルンバの調子あきれ気味　佐
思はせぶりにミサイルを打ち　吉
ゆるきやらにぜひ投票と頼まれて　敦
名物弁当すべて完売　佐
花の森ル・コルビジェを想ひつつ　敦
斑雪の残る美術学校　仝

ナオ 猫の仔が主役となつた物語　吉
どうやら君はアニメ向きだよ　佐
カンフーの道統を継ぐ女弟子　吉
洗ひ髪の香いつもさはさは　敦
口づけは眼鏡をはづすその後に　佐
切札を出す若き賭博師　吉
ビンテージワインを注ぐ瑠璃の杯　佐
都会暮らしに狸あこがれ　吉
外套の衿にほつこり月明り　佐
鞄の中は英字新聞　敦
ナウ 機関庫のD51を撮るカメラマン　仝
癒しの曲は軽くひそやか　佐
ふるさとへ納税をせん花の頃　石
うららな空の雲を見上げる　佐

連衆　永田吉文　武井敦子　間　佐紀子

執筆（中央）が「文台捌き」を終えて歌膝に構え、付句を待つ

平成二十八年俳諧芭蕉忌　正式俳諧
俳諧連歌脇起二十韻

夢よりも現の鷹ぞ頼母しき　翁
空広々と大根干す頃　秀樹
シンフォニー今しタクトの閃きて　文子
けん玉うまく中皿に乗せ　路子
ウ 幸運の女神微笑むやうな月　了斎
木犀の香に恋心ふと　良子
相聞の歌を詠み合ふ秋麗　暁巳
淡路を出でて三年過ぎたり　酔山
逆転のヒットにドーム沸き上がる　淳子
運慶作の仁王像立ち　敦子
ナオ 溶けかかる氷あづきの椀ひとつ　転石
昼月仰ぐ三伏の路地　雅子
ポストまで赤い鼻緒をつつかけて　弘子
今は古城に住まふ麗人　アンズ
伯爵はあやかしめいて愛ほしく　千惠子
チタン刃あてるこはき顎鬚　文伸
ナウ 峪合にシングルモルト熟睡す　霞
雪解の水の清くさらさら　遊民
教へ子の旅立ち祝ふけふの花　孝子
惜春の色染めるスケッチ　執筆

平成二十八年十月十九日　首尾
江東区芭蕉記念館に於いて興行

平成二十八年十月十九日
於　江東区芭蕉記念館

平成二十八～二十九年度
猫蓑会正式俳諧配役

宗　匠　緑華亭孝子
脇宗匠　橘　文子
副宗匠　鈴木　了斎
執　筆　佐々木有子
知　司　武井　雅子
副知司　若林　文伸
座　配　松原　弘子
花　司　林　転石
香　元　鈴木千惠子
配　硯　高塚　霞
仝　内田　遊民
老　長　倉本　路子

正式俳諧を終え、配役全員で明雅先生の遺影を囲む

近・現代の連句界と連句誌（上）

東 明雅

『国文学　解釈と鑑賞』第六七一号
昭和六十二（一九八七）年五月刊より転載

明治元年（一八六八）から昭和六十二年（一九八七）まで約百二十年間の俳諧（連句）と連句誌とを考察する場合、次の四期に分けて説明するのが分かりやすいと思う。

① 変動期（明治初年より明治二十五年ごろまで）
② 衰退期（明治二十六年ごろより大正末年ごろまで）
③ 研究期（昭和初年より昭和四十五年ごろまで）
④ 実作復活期（昭和四十五年ごろより今日まで）

❶（明治初年より明治二十五年ごろまで）

変動期という名称は、やや誤解を受ける名称かも知れない。というのは、維新を境に、政治・社会・文化すべてに大きな改革が断行され、俳諧の世界にも直接・間接に大きな影響が及んだことは否定のできない事実である。三百年太平の続いた徳川幕府の倒壊によって、明治二年の東京遷都、藩籍奉還、四年の廃藩置県、五年の義務教育実施、同年の太陽暦採用、また七年の教導職の設置とそれに俳諧師を登用したことなど、特に太陽暦の採用と俳諧師の登用とは、俳壇に大きな衝撃を与えたが、当時、多く存在した俳諧師はそれなりに順応して、作品の大部分は幕末以来の俳風の延長が流行し、根本的な意識の変革はごく一部を除いて、あまり見られないからである。

太陰暦、干支の廃止は明治五年十一月、太政官布告により公布され、来る十二月三日をもって明治六年一月一日と定められた。これが旧来の俳諧師に与えた打撃は想像することができる。何しろ自分の俳諧の根底が揺がされるのであるから、他の政治的・社会的変動にはさほど関心のなかった彼等もこれには驚いたのも無理はない。新暦によれば、新年は冬となり、七夕や盂蘭盆は夏の行事になり、従来、それぞれの季題にあった情趣が失われるものがある反面、新しく、紀元節とか、陸軍始のような全く馴染のないものが多く流入して来た。だから、いろいろの混乱が起り、旧い俳諧師たちの多くが反撥したことも肯ける。しかし、彼等も時勢には勝てず、早くも七年の初夏には、四睡庵壺公の「ねぶりのひま」が出て、太陽暦実施後初めての分類俳句集として、新年を冬から分離し、初春を二月に、それから順次一ヶ月おくれにしている。また、新しい季寄せも、明治九年十一月に横山見左の「俳諧新選四季部類」が現われ、ついで十一年七月には根岸和五郎の「太陽暦四季部類」、十三年六月には萩原乙彦の「類題季寄俳諧手洋燈」が刊行されて、一応この問題が解決した。

次に、もっと社会的な問題として、当時の俳壇をゆり動かしたのは、俳諧師を教導職として登用しようという政府の方針であった。このことは明治五年四月、政府が社会教化を目ざし、教部省に教導職を置くことを決めたことに発する。翌六年二月、教部省は神官僧侶の外、俳諧師をも加え、教導職に任命することを決め、同年五月、試験によって三森幹雄と鈴木月彦、推薦によって関為山・橘田春湖・鳥越等栽らが採用され、任命された。

市井の俳諧師が登用されて、新しい政府の役人になったのであるから、彼らが誇りとし、感激したのは当然で、彼らも官の方針に積極的に協力するとともに、それぞれの地位を利用して、結社を創立し、自己の勢力の拡大をはかったのである。

明治七年四月、関為山を社長として、橘田春湖・鳥越等栽らの率いる「俳諧教林盟社」が発足し、同年八月には三森幹雄・永井孤登・竹沢如白・伊藤有終などの発起で「明倫講社」が誕生し、幹雄がその社長となった。この二つの結社は互いに対抗意識があり、両派で俳壇を二分する勢いとなったので、その争いは激しくなり、それぞれ、信州や上州などに支部を設け、数千に上る会員を擁するに到った。

特に若い覇気にみちた幹雄の主宰する「明倫講社」は万事に積極的で、明治十三年十二月「俳諧明倫雑誌」を刊行して、三千の社員に配布、また、俳諧演説会をひらいて、大いに発展した。教導職は明治十七年八月廃止されたが、幹雄はその翌年三月、「明倫講社」を「神道芭蕉派古池教会」に改組、俳壇の一大勢力となり、専ら芭蕉の偶像化・神格化に努めた。さらに明治二十二年夏、「俳諧矯風会」を設立、七月、「俳諧矯風雑誌」を刊行したが、このようになればなるほど、祖翁芭蕉の真の風雅から程遠いものになって行くのである。

市川一男の「俳句百年」（稿本）によれば、「近頃俳諧師の宗匠と唱ふる者、府下のみにても殆ど千名に近し。されども大抵は点取料にて糊口するまでにてその道を知るもの十名とはあらず。俗間俳諧のさかんなる斯道はじまりてより未曾有のことといふべし。されど右等平凡宗匠の増加するはまた斯道のため憂ふべきことなり」という記事が、東京日日新聞の二十五年三月十二日付で出ているとのことで、そのころはさしずめ俳諧のブームであったことが知られる。

このうち、どのような俳諧師が有名であったか。有名と実力とは必ずしも一致しないだろうが、一応、明治四年の正月に出された蕉俳位付という表（大塚毅編著・明治大正俳句史年表大事典所収）を見ると、百五十六人の全国の俳諧師が、相撲の番付表のように東西に分けられ、それが皆アメリカの通貨弗で評価されているのがおもしろい。まず、東方の千弗が当時人気第一であった京都の八木芹舎であり、続いて東京三大家の一人橘田春湖が九百九十弗、三河の佐野蓬宇が九百七十弗で上位を占めているのに対し、西方は大阪の高松蟻兄が千弗、東京三大家の一人鳥越等栽が九百九十弗、京都の中島黙池が九百八十弗、勧進元に東京三大家の関為山が千弗であるのは当然であろう。さらに目ぼしいものを拾えば、小林見外が九百八十弗、其角堂永機が九百弗、三森幹雄が九百弗、施無畏庵甘海が九百五十弗、月の本素水が八百九十弗、羽洲園羽洲が九百三十弗、山内曲川が九百五十弗、その中に駿河の松永蝸堂が八百十弗で入っているのが注目される。その他、明治二年の「俳諧新聞誌」、同年刊の朝陽堂九起編「俳家人名録」、明治三年刊八巣謝徳の「俳諧画像人名録」、同年刊の「東京諸先生高名方独案」、菊守園見外編の「槻弓集」などを見ると、全国の俳諧宗匠の主だった者を知ることができる。

これらの宗匠たちのうち、蟻兄（明治五年没）、見外（明治六年没）、為山（明治十一年没）、春湖（明治十九年没）、芹舎（明治二十三年没）、等栽（同年没）と、第一期中に没した人も多いが、永機・幹雄・羽洲・蝸堂・曲川などは、次の第二期にいたって実力を発揮したのである。

この期に出版された俳諧集としては「俳諧目に立つ塵」（永機編）が明治十六年一月に、「かめ登千句」（永機編）が同年十二月に出版された。また広田精知編の「俳諧自在古今集」も同年七月出版、さらに明治二十年に没した伊那の漂泊俳人井上井月の連句・俳句を集めた「名残の水くき」が明治十八年十月出版されているのも珍しい。

また、「俳句百年」（稿本）によれば、明治十三年十二月に「俳諧明倫雑誌」が出版された当時、俳諧誌としては「正風新誌」（東京）・「友雅新報」（伊勢）・「観風新誌」（越後）の四種類であったものが、明治二十三、四年の頃には、四倍強の十七種に達したという。

しかし、これらの刊行物・雑誌を通して窺うことのできる当時の俳風は、勝峯晋風が「明治俳諧史話」（昭和九年刊）の第一章に指摘した通り、「炭俵」の付合に現われた軽み、町人文学としての浅い趣向と気分をもって軽く言い廻した表現法のものが大多数で、俳諧師たちの古い文学観・知的水準・生活態度から見ても、新しい西洋の文化を吸収した青年たちを満足させるものではなかった。

❷（明治二十六年ごろより大正末年ごろまで）

明治も二十年代になると、俳諧の上にも新しい機運が動いてくる。その中心となったのは正岡子規や尾崎紅葉など、新しい教育を受けた青年たちであった。彼らの俳壇への登場は明治二十三年に紫吟社を結んだ紅葉が先んじたが、正岡子規は明治二十五年新聞「日本」に「獺祭書屋俳話」を発表し、翌二十六年十一月同紙に「芭蕉雑談」を連載して、芭蕉の偶像を破壊し、旧い俳諧を攻撃し始めた。

この明治二十六年（一八九三）は、芭蕉が大阪で没してから、正当二百年忌の年である。その前明治二十年には芭蕉の墓のある近江の義仲寺で、永機が取越し二百回忌法要を七日間にわたって盛大に行ない、二十六年には其角の芭蕉追悼集「枯尾花」に倣って、十一月「元禄明治枯尾花」を刊行しているが、まさに芭蕉は没後二百年にして、最も手痛い攻撃を受けたことになる。

「芭蕉雑談」は明治二十六年十一月十三日から翌二十七年一月二十二日まで二十五回にわたって連載されたが、その中で、子規は芭蕉の偶像性をうち砕くと共に、「発句は文学なり。連俳（連句）は文学に非ず」という、「連句非文学論」を公表したのである。

連俳（連句）固より文学の分子を有せざるに非ずといへども、文学以外の分子をも併有するなり。而して其の文学の分子のみを論ぜんに発句を以て足りとなす。ある人、又曰く、文学以外の分子とは何ぞ、答へて曰く、連俳に貴ぶ所は変化なり。変化は即ち文学以外の分子なり。蓋し、此変化なる者は終始一貫せる秩序と統一との間に変化する者に非ずして全く前後相串聯せざる急遽倏忽の変化なればなり。例へば歌仙行は三十六首の俳諧歌を竝べたるものに異ならずして唯々両首の間に同一の上半句若しくは下半句を有するのみ

この論をそのまま読めば、連句というものは発句だけに文学性があり、脇句以下は「全く前後相串聯せざる急遽倏忽の変化」で全く文学性はないように受け留められる。これでは芭蕉の最も苦労したものを無視し、否定するもので、すくなくとも、七部集の連句を精読せず、あるいは去来抄以下の俳論も全く読んでいないものとしか言いようがない。即ち、芭蕉が最も苦労した前句と付句との間の余情を汲み取る、うつり、におい、ひびき、位、あるいは三句の転じの法則を、全く知らぬか、あるいは知らぬごとく装った発言としか考えられない。おそらくは前者であろう。しかも、歌仙一巻全体をゆるやかに包んでいる序・破・急の配慮、それらを助けるための式目や作法の微妙な働きを一顧もせず、全くでたらめに変化しているかのような言い方である。地下の芭蕉が聞いたら怒るどころか、苦笑するに違いない。青年客気の言である。大体、それでは狭い意味での一貫せる秩序と統一の間に変化するもののみが、果して文学の名に価するものであろうか。すぐれた俳諧の変化は広い意味では十分に一貫せる秩序と統一の間で変化しているが、それを子規は見ぬくことができなかったのである。現に、子規は「俳諧三佳書序」（明治三十二年十二月）において、「自分は連句といふ者余り好まねば、古俳書を見ても連句を読みし事なく、又自ら作りし例も甚だ稀である。然るに此等の集にある連句を読めばいたく興に入り感に堪ふるので、終には、これ程面白い者ならば自分も連句をやつて見たいといふ念が起つて来る」と書いている。因みに「俳諧三佳書」とは、「猿蓑」・「続明烏」・「五車反古」を纏めたものである。子規は「猿蓑」の連句をその死の三年前になって初めてまともに読んだのである。この事実は重大であろう。

この問題について故市川一男は「俳句研究」（昭和三十二年七月号）に「子規のぬれ衣―連句非文学論の正体―」という文章を書き、子規の連句に関する資料を二十三箇条に掲げ、子規が連句に全く否定的であったのは、右に述べた「芭蕉雑談」における文章のみで、あとはすべて肯定的であり、「文学でなく、興味のない連句に、何で子規のような性格の人が、のぼせて鼻血を出しながら連日連夜熱中したり」（同資料11・12）、旧になずまぬ自己の見識を示しながら門下生に教えを垂れたり（同資料15）、旧派の宗匠と歌仙を巻いたり（同資料13・16）しようか、まして自分で『独吟百韻』を創作して日本新聞に発表したり（同資料19）、連句の歴史・式目を詳細に解説したり（同資料18・22）、天明の連句の評釈・鑑賞をしてこれを推奨したり（同資料18）、まして同資料23のように、いくら「俳諧三佳書」の序文と言っても、さきに引用したように「此等の集にある連句を読めばいたく興に入り感に堪ふる」ので、終には自分もやってみたいと思うなど言うであろうかと述べておられる。これらの資料は、明治二十三年（子規24歳）から、明治三十二年（子規33歳）までのものであるから、市川氏は「連句非文学論」は子規の若さによる筆のすべりであり、明治二十六年（子規27歳）の当時は、彼に芭蕉の連句を論評するだけの準備が出来ていなかったと結論づけられているが、私も大むねこの説に

賛成である。しかし、市川氏は子規は結局、後輩によって「連句非文学論者」の「ぬれ衣」を着せられたのであると言われる。けれども、当時、子規が若くて口がすべったにせよ、連句に対する真の理解が不十分だったにせよ、「芭蕉雑談」における論が新聞に公表され、それがその後公けに取り消されていない限り、実際はどうであるにせよ、子規が世間から「連句非文学論者」と見られるのは当然であり、子規はたとえ、不本意であろうとも、それを甘受すべきであり、その影響は子規の考えた以上に大きかったのである。

市川氏によって、子規に「連句非文学論の主張者」であるという「ぬれ衣」を着せたと言われるのは、子規の門人の随一である高浜虚子である。この高浜虚子の連句に対する態度も独特、微妙なものがあった。虚子は子規生前の明治三十二年五月の「ホトトギス」に、「聯句の趣味」という一文を発表し、連句も宇宙の現象の美的描写で、ただ小説などが縦断的、即ち縦に因縁因果の糸を辿るのに反して、連句は横断的、即ち横に各種の現象の切口を各別に観察するところに違いがあると述べた。これは縦に貫く因果の糸がない代わりに、連想という横の変化の塩梅を重ねることにより、連句一篇には終極的に統一があると言っているのである。

さらに、子規没後の明治三十七年には、同じ「ホトトギス」に連句に関する虚子の発言が三つあり、明治三十九年には二つ、明治四十年にも一つあった。これらの中で彼は「俳体詩」というものを提唱しているが、これは連句の中から、意味的連繋をもったフレーズを抜き出し、それにヒントを得て作り出した詩である。即ち、連句の中で転じの弱い部分に着目し、それを取り上げるという詩の方法であった。連句が付けと転じとをメカニズムとしている文学だとすれば、その転じを無視する新しい俳体詩なるものが、連句の本道にどれだけつらなるものか疑念なきを得ない。

とに角、虚子は連句に大きな興味と関心とを持ち、次の第③期であるが、昭和十三年四月、「誹諧」という雑誌を長男の年尾に創刊させ、昭和十九年まで続けている。しかし、この雑誌に見られる虚子の連句に対する考え方には新しいけれども特殊なものが多い。伝統を守った俳諧師たちから批判されたのも当然である。

明治二十年代を中心に俳壇は新派と旧派に分かれた。新派は尾崎紅葉の紫吟社、伊藤松宇の椎の友社、子規の日本派、大野洒竹の筑波会、角田竹冷の秋声会などで、その連句に対する態度はいろいろであったが、最も攻撃したのは日本派であり、明治三十年以後はこれが大勢を占めるに到った。

一方、このころまでは、旧派と呼ばれた旧来の俳諧宗匠、及びその門流も、伝統を守ってまだまだ地盤は強固であった。しかし、新しい新進の青年たちに見放され、有名な俳諧師が没くなるたびに、その派の核を失うことになり、次第に淋しくなるのは免れなかった。明治二十七年に岩波其残・加部琴堂、明治二十八年に佐野蓬宇、明治三十四年に上田鷹居、明治三十五年に馬場凌冬、明治三十六年に山内曲川、明治三十七年に穂積永機、明治三十八年に雪中庵梅年、明治四十三年に春秋庵幹雄・下平可都三、大正三年に渡辺萎文・羽洲園羽洲、大正四年に大主耕雨、大正八年に森山鳳羽・松永蝸堂、大正十四年に荒井閑窓が没し、旧幕時代からの俳諧師の大部分は姿をなくしてしまった。

しかし、この間、明治三十年に佐々醒雪の「連俳小史」、明治三十五年に下平可都三の「富山百歌僊」。伊藤松宇は「にひはり」を明治四十四年六月創刊。瀬川露城の「雪月花」、大正五年に西尾其桃の「其桃集」、大正六年に根津芦丈、中村竹邨の「山一重」などの秀作が出版され、その他、俳諧師が没するたびにその追善集の類が編まれ、その数も多い。（次号に続く）

解題●『国文学　解釈と鑑賞』誌の昭和六十二年五月号は全体を「特集・連句（俳諧）への招待――伝統と創造」とした。この一文はその一部として掲載されたもの。明雅先生が同様のテーマで書かれたものは他にもあるが、これが最も詳細なもののように思われる。明治元年から昭和六十二年に至る百二十年の連句界の動向が、たんに文芸の世界での出来事だけでなく、日本社会や政治の状況との関連なども含めて活写され、今後の連句界の行く末を長い視野をもって考える上で、多くの示唆を与えてくれる。

同誌も、発行所の「至文堂」も既に存在しないが、当時の至文堂社主、佐藤泰三氏の姪にあたられる猫蓑会同人会長の坂本孝子丈と、明雅先生のご遺族とのご許可をいただき、転載させていただいた。（編）

第百三十八回猫蓑会例会作品 1～4

玫瑰の座

歌仙「時も潮も」　鈴木了斎　捌

玫瑰や時も潮も人待たず　了斎
夏雲追うて佇ちつくす砂　淳子
万華鏡次の世界は何ならん　文伸
胸の幼児夢に笑まふか　英雄
いつせいに出た出た月と歌ひ出し　俊子
夜になつても止まぬ秋蟬　斎
ウ 零余子飯母の十八番の炊きあがり　淳
唐津大鉢賓客の前　俊
天使の輪輝く髪が自慢にて　淳
白きうなじにそつと目をやり　英
声だけはいつも昔の彼に似る　俊
スポーツカーの残す爆音　伸
一戸建皆似た屋根に冬の月　仝
鳥にまたがり冒険の旅　斎
鍋の湯気囲む咄のきりもなし　英
青いほのほがゆらめいてをり　斎
花火師の忽ち闇に溶け入りぬ　淳
切子グラスにすする日本茶　俊
ナオ 六十五超えて知つたる世の虚実　伸
つひに未完の油彩百号　英
ヴィオロンのワルツの揺れてどこまでも　俊
岬の果を馬と連れ立つ　淳
初恋のひとを奪つた己が父　斎
燃やし尽すか殺し尽すか　淳
フィギュア抱きただただ部屋に引き籠る　英
地球見下ろしゐる冬の星　伸
亜米利加も盛者必衰逃るまじ　斎
留学先を決めかねてをり　淳
一位の実食みたる村の社にて　伸
弓張月をよぎる鳥影　英
ナウ 鮭燻しつつ小屋がけの漢達　俊
火酒の酔に自由奪はる　淳
倖せは千両の水飲めること　英
累代の血の流れあたたか　伸
散る花の色を几帳と競ひつつ　斎
炉塞前に改むる軸　俊

連衆　上月淳子　若林文伸　鈴木英雄
三木俊子

鷺草の座

歌仙「白寿百寿」　武井雅子　捌

東郁子九十六歳
階は白寿百寿へ夏座敷　雅子
極暑の候に祝はるる幸　郁子
大川に水脈引き遊ぶ舟ありて　秀樹
釣竿の列並ぶ橋下　昭
山の端の夕月共に賞で合へり　郁
風の意のままコスモスの揺れ　雅
ウ 目抜通り秋刀魚焼く煙もうもうと　昭
美容院には淑女三人　樹
恥ぢらひを少し残して奔放に　雅
でもうつとりとディーンフジオカ　郁
ジャニーズは多角経営お笑ひも　樹
都知事候補に野党連合　昭
雪女郎さつきちらつと見たやうな　郁
寒施行僧月影の中　樹
弟に痛いの痛いの飛んで行け　昭
カレーライスはいつもお代り　雅
弾の痕微かに残る花大樹　昭
軟式野球麗らかな原　郁
ナオ クレソンで季節味はふプロヴァンス　樹
黄色の鳥の羽が一枚　雅
名処の酒携へて師を訪へり　郁
微分積分みんな忘れた　雅
判じ物どれにしようか禰宜団扇　昭
土用鰻の代りあれこれ　樹
本命は修羅場を経てもあなただけ　雅
大統領の夫となる日よ　郁
知らんふり猫は炬燵で丸くなる　樹
エレキギターに凝りしあの頃　昭
たまさかに故郷の宮の月仰ぐ　郁
美術展には沈金の筥　雅
ナウ 藤袴谷戸の岩肌紫に　昭
郵便集配時刻通りに　樹
世界中飛び回りたる漢あり　仝
夢のごとくに過ぎしこの道　郁
衣桁には祖母の友禅花衣　雅
野点の席に休むてふてふ　昭

連衆　東郁子　青木秀樹　松原昭

平成二十八年七月二十八日
於　江東区芭蕉記念館

睡蓮の座

歌仙「青嵐」　　**佐々木有子　捌**

樹を揺らし吾をゆらすや青嵐　有子
書は閉ぢしまま夏果つる頃　文子
マスターのコーヒー少し濃い目にて　酔山
手描きのメニュー客に好評　弘子
歌ひつつ子等と帰りぬ月の道　志世子
水澄む川の流れさらさら　文
ウ　初猟の銃念入りに磨きをり　山
ナンパにも要る準備体操　文
告白す身代つぶす覚悟持ち　弘
市議会議員の賢夫人とか　山
バッキンガム衛兵眉も動かさず　文
痒い痒いも意思で切り捨て　世
凍月に散らし太鼓の芝居小屋　山
どこへ行くにも雪駄丹前　弘
遊び人いやＩＴの長者らし　仝
雲近く住みきやら蕗を煮る　文
千年余古木の花は薄墨に　仝
山のふもとにポッと春の灯　山
ナオ　ままごとの夕飯ですよ声うらら　世
黒犬避けて通る門前　文
地蔵様地獄の入口まで共に　仝
綱取りまたも泡と消えたり　山
スクープの隠し球もつ週刊誌　弘
おねだり上手ポルシェ・マンション　仝
傘かしげなじみの宿へ昼下がり　世
戦中育ち恋も実直　仝
繚乱の金魚誘ふ夢幻界　文
たちまち空になりし菰樽　有
月今宵刺し子に時を忘れたり　弘
台風告げる天気予報士　仝
ナウ　文明も栗も中国より来る　世
ポケモンＧＯで人とぶつかり　山
節々の痛み互ひに自慢して　弘
稽古欠かさぬ謡ひ尺八　山
まなかひに降り注ぐ花天守閣　有
奥の庭には遊ぶ蝶々　世

連衆　橘　文子　吉田酔山　松原弘子
秋山志世子

駒草の座

歌仙「それぞれの山川」　　**奥野美友紀　捌**

それぞれの山川ありて帰省の子　美友紀
氷いちごに添へるスプーン　千惠子
新刊本表紙の色を選ぶらん　正夫
来賓挨拶手短に済む　一枝
尋ねきて右折の路地を照らす月　路子
小唄三味線萩揺るる庭　夫
ウ　ＣＭを二本撮り終へそぞろ寒　千
みんなの好きなカレー振舞ふ　枝
あの男口当たりよきことばかり　仝
どぎやんもこぎやんも忘れられんと　路
メモリーの足らぬパソコンフリーズし　千
ポケモン追つて夜の公園　夫
背に負うた熊手ががしと月掴む　千
上々の燗並ぶ徳利　夫
監督の指示片言の日本語で　紀
夢を抱いて過ぎし十年　路
校庭の花の下にて同窓会　夫
段ボール箱仔猫みやあみやあ　千
ナオ　放哉忌ゆつくり開く詩のノート　枝
欧州旅行新しい服　仝
偏西風地球の自転休みなく　千
いつも受け取るちらし広告　路
冷蔵庫特売品をつめこんで　枝
プールサイドで頼むシャンパン　夫
遠くから見れば年齢わからない　紀
辻の夜鷹の被る手拭　千
優しくて金のありそなとこに惚れ　路
候文の便り文箱に　仝
丸窓に今宵の月の収まりて　枝
足湯の湯殿蟋蟀の鳴く　千
ナウ　突然にミューズ降臨芸術祭　仝
モンパルナスのカフェのコーヒー　枝
音もなく電気自動車ひとめぐり　仝
双眼鏡で港見下ろす　夫
花吹雪内定通知受け取りぬ　紀
生きて楽しむ囀の道　路

連衆　鈴木千惠子　國司正夫　西田一枝
倉本路子

第百三十八回猫蓑会例会作品 5～8

岩梨の座

歌仙「石の芭蕉」　永田吉文　捌

にこやかな石の芭蕉や滝の音　吉文
　歩巾弛めて巡る片陰　遊民
評判のシェフの料理に列できて　敦子
　いつもの猫が客を出迎へ　碧
天守閣窓から仰ぐ望の月　健
　ズーム回してシャッターを切る　吉
ウ 寄合に香り漂ふ捨団扇　民
　そつとつぶやく甘き言の葉　敦
あのクセが始まつたねと下を向き　碧
　乳房を隠すマニキュアの指　健
くゆらせるタバコの煙ゆらゆらと　吉
　紙ひかうきを遠く飛ばして　民
月影にきらめいてゐる霰酒　敦
　湖北菩薩の雪深き里　碧
優しげな大谷君がホームラン　健
　流行の服見事着こなし　吉
逆しまに蜜吸ふ鳥の花万朶　民
　蜃気楼追ひ自転車の旅　敦
ナオ それぞれに楽器を持ちて春の苑　碧
　世界遺産に考へる像　健
ケータイのＧＰＳの不慣れにて　吉
　自由気ままに生きてにこやか　民
二番草腰伸ばしつつ精を出し　敦
　メロンをもらふ若きシスター　碧
ラブレター密かに渡す裏梯子　健
　輝の手にそつと口づけ　吉
生命線ちよつと書きたす誕生会　民
　家鳴りの出る梁太き家　敦
月よぎる放物線は宇宙船　碧
　べい独楽廻す子らの賑はひ　健
ナウ ノーベル賞夢見て塾へそぞろ寒　吉
　スタップ細胞ありやなしやと　民
売れ筋の商品けふはお買得　敦
　趣味が高じてすぐに人真似　碧
花大樹千年の彩仰ぎをり　吉
　胡蝶ひらひら舞へる山裾　健

連衆　内田遊民　武井敦子　松本碧
　由井　健

撫子の座

歌仙「せせらぎを」　平林香織　捌

せせらぎを聴くや土用の翁像　香織
　風はたと止み兆す梅雨明　久美子
町工場油まみれを誇りにて　孝子
　ティータイムには猫も参加し　泉子
コンサート果てて見上げる月円か　富子
　秋の薔薇には銀色の露　孝
ウ しづしづと木の香芳し御遷宮　久
　階段昇るミニのスカート　仝
あのひとの仕種ばかりが目裏に　富
　括弧でくくるxとy　孝
文様に凝つたからくり宝箱　泉
　密漁船を追へる凍月　孝
あつ地震たうとう来たか炬燵消す　富
　こぼれた酒を掌に受け　孝
先づ野菜食事の順序守るべし　久
　医薬無縁で長生きの婆　泉
花の頃大陸横断決行す　仝
　グーグルで見る黄砂舞ふ国　富
ナオ うららかにお揃ひの帽保育園　孝
　午睡の夢は獏に食べられ　泉
ノミネートばかりで終はる直木賞　久
　俺も彼女もバイト人生　孝
隔週の同居と別居ちやうどよく　久
　久しく絶えた殿のお渡り　泉
念願の主役射止めるオーディション　仝
　しじみエキスの効果効能　富
山枯るる座敷わらしは奥の間に　孝
　僧軽やかに単車駆り来る　仝
月光のきらめく湖に糸を垂れ　久
　庭掃く背にまとふ溢れ蚊　富
ナウ ピストルが響き母校の運動会　孝
　弁当交換それも楽しみ　泉
ほつとする雀このごろ増え出して　久
　合唱クラブいつも盛況　富
弘前城百年の花咲き誇る　織
　絵凧字凧の競ふ大空　泉

連衆　副島久美子　坂本孝子　青木泉子
　名古屋富子

螢草の座

歌仙「やあやあと」　斎藤久美　捌

やあやあと朗ら朗らや日焼け顔　久美
大きな西瓜提げる駅頭　良子
峡の里国境の山迫り来て　忠史
満足さうに拾ふ陶片　あや
月賞でつ御朱印船の発ちし浜　暁巳
初猟支度友と確認　史
ウ 名の木散る傍に寛ぐ客のをり　良
彩のよき二段弁当　や
半襟をちよつとずらして科つくる　巳
エースで主将イケメンの彼　史
甘いキスミスキャンパスに勝つたかも　や
聖母の像を拝む朝夕　良
鞭響く月の平野を犬の橇　史
古い映画に似合ふ熱燗　や
それ逃げろ六文銭の旗寄せる　史
ポケモン探し参議院まで　良
これみよのバッヂ光らせ花のみち　仝
往診鞄重い春昼　や
ナオ 種痘跡掻き壊したる悪太郎　巳
へのへのもへじ塀の落書き　良
得度式そこを何とか延ばしたい　や
開けちやいけないお土産の箱　史
メルヘンの秘密の鍵はギヤマンか　巳

平成二十八年七月二十八日
於　江東区芭蕉記念館

竹は皮脱ぐ君は衣脱ぐ　良
頼むから獏よ喰らふな恋の夢　史
払ひはしかと永字八法　良
ぼろ市に風呂敷程の店拡げ　や
銀行員の止める自転車　巳
ジョコビッチそつくりさんの案山子立つ　や
影踏み遊び月の夕暮　仝
ナウ 村芝居向かふ三軒誘ひ合ひ　史
茶請けはいつも婆の漬物　巳
時折は烏の知恵を借りもして　良
耐震補強済みし図書館　や
おほどかに寧楽（ならみやこ）の京は花ざかり　美
威儀を正して曲水の宴　史

連衆　本屋良子　根津忠文　中林あや
島村暁巳

綿菅の座

歌仙「江戸の纏」　田中秀夫　捌

振りあぐる江戸の纏や百日紅　秀夫
蝉時雨降る堀端の径　鄭和
録りためた料理番組試しゐて　ひろみ
形よく盛る大ぶりの皿　霞
月昇りいま出港の銅鑼を聴く　美奈子
椋鳥群れる丘の公園　夫
ウ 凡僧のそろそろ参る道元忌　和
少女ぞくりとさせる流し目　み
擦り寄りて谷間のシャドー押し付ける　霞
はや背信のこの不条理よ　奈
宇宙では星は何度も再生す　夫
月中天にイオマンテの夜　和
出番待つ踊の子らの息白し　み
ｉＰｈｏｎｅ７すぐに買ひたい　霞
ポケモンとボケモンばかりこの浮世　奈
負けて清しき野球少年　夫
ご近所となりて三十歳（みそとせ）花の宴　み
手招きしきり望潮かも　和
ナオ 逃水を追うて峠を越えつらん　霞
書いてなんぼのはつぱふみふみ　奈
涙などこぼさぬやうに上を向く　夫
工場地帯煙いく筋　和
ジーンズを仕立て直した掛け鞄　み
マント羽織って下駄を鳴らして　霞
姐さんの念を入れたる姫始　奈
相手替はればおらが春なり　夫
おん馬（ま）来るうはさ雀の喧し（かまびす）　和
絵本読みつつ先に寝るパパ　み
羅漢像笑漏らしたり真夜の月　霞
口三味線に古酒がよく合ふ　奈
ナウ 爺婆の運動会に孫曾孫　夫
座敷童子は未だ居座る　和
ミシュランもニホンのトイレワンダフル　み
拾つた財布とどけませうね　霞
花吹雪舞台の主役気取りつつ　夫
朝寝の夢は小町楊貴妃　奈

連衆　髙山鄭和　江津ひろみ　高塚霞
鈴木美奈子

紫陽花の座

歌仙「初蛍」　吉田酔山　捌

振りむけばここにもひとつ初蛍　酔山
　峡の草の戸夏至近き頃　雅子
子供等は積み木遊びに夢中にて　郁子
　へのへのもへ字何にでも書く　香織
修復の遺跡の柱月の射し　転石
　犬芸やつとできたうり坊　俊子
ウ　鬼退治舟を漕ぎ出す秋の潮　石
　憎さも時に可愛くもあり　雅
再会の背中にそつと爪をたて　織
　遠くに響く教会の鐘　郁
いつまでもテロの悲劇を繰り返し　雅
　大統領選シャンパンを抜く　俊
少しだけふるさと納税してみるか　石
　お座敷列車窓に凍月　織
次々と踊り自慢や歌自慢　俊
　住宅ラッシュマンションも増え　雅
楽しみは京の名刹花万朶　郁
　棒鱈を煮る若き板前　石
ナオ　啄木忌移動図書館長い列　織
　年金暮しいつもかつかつ　雅
繁栄のバブルの時代懐かしく　郁
　ヒールの音の響くオペラ座　織
あいつまた屋根に登つて恨み節　石
親分粋に渋団扇差し　俊
よく見ればなんとハンサム金魚売り　郁
　いくつ拾つた捨てられし恋　雅
品の良い巾着なんと古着から　織
　お札納める小筥朱塗で　俊
月の下秋の遍路のお接待　雅
　朴念仁が松茸を焼く　石
ナウ　五輪選手運動会で緊張し　俊
　晩節汚すことはせぬとか　雅
飽きもせず自転車習ふ孫娘　郁
　アンパンマンも絆創膏貼り　織
花大樹幾度耐へたか地震嵐　山
　春の火鉢でしばし微睡む　石

連衆　武井雅子　東　郁子　平林香織
　林　転石　三木俊子

花菖蒲の座

歌仙「広重」　大島洋子　捌

広重のやさしき線や梅雨の入　洋子
　ビルの谷間にかかる蜘蛛の囲　秀樹
通勤は快速電車乗り換へて　健
　革の鞄に拘りがあり　未悠
月今宵供へる物はみなまるく　敦子
　水の美味しい爽やかな里　千惠子
ウ　鮭の来る河にムックリ響かせる　千
　胸毛の濃さも恋の手立てに　健
父に似て女とみればまめになり　敦
空也最中を予約して買ふ　千
出したのは墨で塗られた領収書　樹
　コートに包む骨折の足　悠
ラクビーのボールは月のバー超える　千
　世界遺産に登録の城　敦
妖怪も執事と共にお出迎へ　洋
　ベストセラーをまた読み返す　悠
セスナ機は淋しき花の飛行場　樹
　小さき爪を猫の子が磨ぐ　千
ナオ　山笑ふ黒板の文字ありがたう　敦
　特技を持つたカフェの店員　千
アラブ語の通訳引つぱりだこの今　悠
　銭湯の壁注意書き貼る　千
冷酒を差しつ差されつへぼ将棋　健
　水鉄砲で狙ひ撃ちして　敦
告白は嘘つく時と同じ声　仝
　DVほんとは愛の極みか　悠
十字架の残れる島の灯台に　健
　自炊上手のバックパッカー　悠
恐々と渡る吊橋月が追ふ　健
　こんなところに鵙の早贄　千
ナウ　柿の実の取つてくれろと熟しゐる　樹
　SMLと仕分けする業　洋
ニホニウム名前を付けて誇らしく　健
　理系女（りけじょ）の私夢もふくらむ　悠
花盛り微動だにせぬ一瞬が　洋
　駅近道ののどらかな路地　執筆

連衆　青木秀樹　由井　健　棚町未悠
　武井敦子　鈴木千惠子

平成二十八年六月十九日
新宿ワシントンホテル　新館

末摘花の座

歌仙「猫会議」　青木泉子　捌

猫会議おわあおわあとついりかな　泉子
十薬匂ふ裏の竹垣　暁巳
城下町名代の菓子を手土産に　孝子
皺を伸ばして地方紙を読む　美恵
探査機の月面着陸成功す　豊美
夜学生寄るコンビニの前　啓子
ウ　ハロウィーンケルトの歴史繙きて　巳
容姿ではなく人柄が好き　孝
悪役で部屋住みのまま五十年　豊
馬の脚にも女房はあり　孝
別珍の足袋のサイズは小ぶりにて　巳
雪大文字照らす満月　啓
京料理器いろいろ愉しみに　巳
青春18きつぷ乗り継ぎ　孝
「せこい」とふ言葉が走る全世界　仝
ニホニウムには喝采を浴び　啓
花咲爺なぜ婆さんぢやだめなのか　恵
ほつと息かけ蒲公英の絮　孝
ナオ　北上の川の堤の弥生尽　仝
ジュゴン確かに見たといふ字　恵
さあみんなサーカス団がやつてきた　巳
瞳に星がきらめきし頃　孝
黄昏に梟の飛ぶ森深く　豊
王の愛さへ掴む小悪魔　孝
ふろ上がりシャネル5番か天花粉　巳
五体投地に呼び起す風　恵
広報車取水制限触れ廻り　啓
盲導犬の歩みゆつくり　巳
姑の看取り終りて月明かし　孝
葡萄酒醸す家の跡継　恵
ナウ　美術展泰西名画に長き列　孝
ジオラマに置くフィギュア数体　啓
不器用な指はいつでも縦結び　恵
知恵と工夫の幼児教室　巳
花霏々と小雨の中を降りやまず　泉
耕の人交はす挨拶　豊

連衆　島村暁巳　坂本孝子　山口美恵
髙橋豊美　小池啓子

花橘の座

歌仙「ちちの実」　若林文伸　捌

ちちの実の父の日を祝ぐ句筵かな　文伸
額紫陽花の今と咲く頃　久美子
裏街道ヴィオラのケース背に負ひて　良子
深呼吸して開け放つ窓　昭
有明に小品ひとつ脱稿し　有子
忘れ扇の折の綻び　一枝
ウ　馬市の準備をさを進むらん　良
遊女もねまるみちのくの宿　枝
飲むほどに口説き上手になる鰥夫（やもめ）　有
マッチョの胸になるが目標　昭
プーチンのこだはり続くウクライナ　良
猫がみやあみやあうるさいといふ　久
銀鼠の凍つる瓦を滑る月　枝
年越蕎麦は爺の出番よ　久
理髪店仰向けにされ蒸しタオル　昭
保存版なる週刊誌読む　有
妖精となりてさ迷ふ花の森　良
暗き所に育ちゐる独活　有
ナオ　春の磯寄せ来る波に子等の声　久
後ろ姿は姉か妹か　昭
文士劇虚実なひまぜ演じつつ　良
見てきたやうなどん底の底　枝
金はなき知なき名もなき君が好き　有
研修生の透けてゐる肌　久
鰻重を茂吉に倣ひ竹にして　昭
カラビナ要らず里山をゆく　久
最近は熊との遭遇多くなり　有
南無阿弥陀仏庵主唱ふる　良
宇宙船月の地平に青き星　久
紅葉狩りまで十八里とは　良
ナウ　若煙草しばし休憩する男　枝
都知事SEKOIと外電が言ふ　昭
プリンターグレーのインク濃くなりて　有
広場に集ひ歌ふイマジン　枝
花守の目を細めたる苗木にて　伸
めかる蛙のどこを吹く風　昭

連衆　副島久美子　本屋良子　松原昭
佐々木有子　西田一枝

花合歓の座

歌仙「姫沙羅や」　高山鄭和　捌

姫沙羅やちよつとおしやれな傘を手に　鄭和
　降りみ降らずみ梅雨どきの街　あや
図書室の書架に絵本の飾られて　霞
　出前の蕎麦の届く裏口　淳子
橋の月自転車そろり押して行く　蓉子
　鰍の釣果ふり返りつつ　忠史
ウ 粛々と字をさらふ子に溢れ蚊が　碧
　路地の奥には秘密基地あり　や
今は昔寄せたる頬の筒井筒　淳
　青道心に重き戒め　霞
あまいけど苦みの残る赤い酒　や
　沖を行くのは西班牙の船　史
凍空をひとり仰げば月の鎌　霞
　鰤大根をひたすらに炊く　蓉
姑は思つたよりも可愛らし　や
　口ずさむのはジャズかロックか　史
花の滝描き友禅に枝垂れをり　碧
　だるまさん転んだうららかな昼　霞
ナオ 山笑ふ茶店を守る矍鑠と　淳
　目指すバス停銭取と云ふ　史
遁走曲円周率をいつまでも　淳
　やはり失敗ゆとり教育　史
雲の峰見上げる高さのぞく谷　淳
ダブル不倫に血の雨の降る　碧
　ＤＮＡすつたもんだの裁判に　霞
　祈るといふは立ち止まる事　蓉
東京の水はどうやら足らぬらし　や
　クレオパトラは牛乳の風呂　史
歴史好き長じて学者月今宵　淳
　だらだら祭りそぞろ歩みて　霞
ナウ 背高の案山子ジーパン履きたかろ　や
　ほら血圧がまた上がるわよ　碧
記者会見謝罪恫喝泣落　史
　やはらかタオルいつも愛用　や
競技場埋め尽して花万朶　和
　仔馬すくすく育つ牧場　蓉

連衆　中林あや　高塚　霞　上月淳子
　五味蓉子　根津忠史　松本　碧

花柚子の座

歌仙「立葵」　江津ひろみ　捌

屈託は幼き日にも立葵　ひろみ
　蝉の生まるる校庭の隅　弘子
ぽつねんと古きレーキの置かれゐて　了斎
　色鉛筆と画帖取り出す　文子
あの月へ住めるその時来ると聞く　路子
　Ｕターンして衣打つ人　芙美
ウ 村芝居女形はなんと助役さん　文
　どさくさまぎれ愛を告白　芙
バツイチは隠して君へのめり込み　路
三角四角増えてゆく角　斎
結晶は顕微鏡下で育ちつつ　仝
　ニホニウムとは実に誇らし　弘
仰ぎ見る初天神の清き月　文
　電話口から友の風邪声　弘
ＬＰのジャズボーカルの掠れ行く　斎
　あれから五年東北の街　路
主無き牛舎を訪へば花の舞ふ　弘
　かたびら雪が肩をかすめる　芙
ナオ 読み聞かす昔話の田螺婿　斎
　理系文系ここが分かれ目　芙
耳順にてサインコサインタンジェント　路
　ねぢり鉢巻焼鳥を焼く　文
古窯の茶碗秀吉作といふ　芙
　手紙でたらす憎い奴なり　文
寝たふりで脚絡ませる三尺寝　芙
　キスで妊娠せぬか心配　斎
武陵源深き峡には玻璃の橋　文
　夢を叶へて老酒を空け　弘
中天の月に対つてひとりごつ　斎
　鯖猫のゐる秋の夕暮　芙
ナウ ハロウィーン魔女もお化けも現れて　仝
　シルクハットに何を隠すか　文
今もなほ紙の辞書だけ引き続け　路
　年金を貯め野球観戦　弘
花爛漫可憐な菩薩笑み浮かべ　み
　漣きらとわたる種池　斎

連衆　松原弘子　鈴木了斎　橘　文子
　倉本路子　間瀬芙美

「明雅先生の古典籍」幻視

鈴木千惠子

平成二十八年十一月十二日（土）十三日（日）、日本近世文学会秋季大会が信州大学で開催された。学会に図書展示は付き物だ。九月か十月に、常任委員の平林香織さんから「今回の展示は、明雅先生の蒐集された古典籍」と伺っていた。郁子奥さまや雅子さんにはお伝えしたが、会期などもよく把握しておらず、猫蓑会員に広めるということには思い至らないでいた。そんな学会の直前、信州大学の速水香織さんから、猫蓑サイトの公式アドレス宛に案内があったのだった。その後事務局の手を煩わせ、「信州大学貴重書展」の案内が会員の皆さんの許に届き、私は罪滅ぼしに（？）課題をいただく。以下がそのレポートである。

十三日、学会の昼休みに附属図書館に向かう。朝晩の冷え込みが厳しいのであろう、満天星（どうだんつつじ）が燃えるように紅葉していた。一階の展示コーナーでは、まず「信州大学の古典籍――東明雅コレクション――」とある解説の前に立つ。すると先生の経歴紹介の中の一文には「また連句では実作の指導者として『猫蓑会』を主宰、信州を拠点とした文芸の振興にも多大な貢献を果たされました」とあった。速水さん、猫蓑の名を出していただき、ありがとうございました。

展示されていた書物は『さくら戸／筆つむし』『祇園物語』『江戸惣鹿子』『恨之介』『清水物語』『太子開城記』『日本永代蔵』『和歌問答』。皆、状態が良く、表紙の箔の美しさなどが目を引く。古典籍の書誌に必要な情報は、巻数冊数・写本板本の別・大きさ・表紙の色や文様・装丁・丁付など。出版を研究の専門とする速水さんが指導され、学生の書いた解説文は丁寧である。

ところが私はと言えば、もともとあまり古典籍には詳しくはない。そして、今回は特に「信州大学の古典籍――東明雅コレクション――」の「東明雅コレクション」の方に興味があり、また与えられた課題もそちら、と理解していた。

そのような観点から、まず注目したのは『清水物語』。表紙見返しに「東明雅氏寄贈」とあり、ああ、この本を先生がご覧になっていたのだなあと実感できて、感慨にふける。

『日本永代蔵』（初版）も西鶴研究者としての先生の業績を語るには欠かせない。こちらの見返しには「長野県寄贈」とあり、図書館の受け入れは昭和三十年となっていたが、それは旧制松本高校の時代にお買い求めになったのではと思う。今回コレクションを拝見し、学問を振り返るに際して、かつて先生が「信濃毎日新聞」に連載された「来し方の記」（全十回）を思いだす。その第五回のタイトルは「『永代蔵』校訂に燃える」である。『日本永代蔵』は「西鶴本の中でも最も多く原本が残っている作品」であり、「私が全国の図書館を回って見て歩いただけでも三十本は下らぬであろう」と書いておられる。そして、その三十本のうち、全く同じとみられるものはなく、どこか皆違っていたとのことである。ご努力は実り、昭和三十一年に東明雅校訂の『日本永代蔵』（岩波文庫）が出版される。

展示の話に戻ると、詳しい解説は古典籍の蔵書印についても付されていた。『日本永代蔵』には「水谷文庫」の印があり、水谷不倒の旧蔵書であることが分かる。『祇園物語』には「赤木文庫」の印があり、横山重の旧蔵書であることが分かる。

「来し方の記」第四回は「先達の薫陶　西鶴研究へ」。松本駅からバスに乗って、片丘村（現塩尻市）の横山重先生のもとに通い、西鶴本や稀覯本を拝見した、と書いていらっしゃる。「来し方の記」には、昭和三十四年に横山先生が『初期仮名草子集』として「恨之介」を出版された話も出てくる。その中に信州大学蔵本「写本恨之介」が全文写真複製で掲載されている、とある。それが、今回展示されたものである。

附属図書館を出て、私は少しだけ信州時代の明雅先生に出会えたような余韻を味わいながら歩いた。再々度「来し方の記」だが、第六回は「俳諧の伝統継承に使命感」で、根津芦丈先生との巡り会いの話である。

先生が松本から柏に移られたのは、その二十年後のことである。

第三十一回国民文化祭あいち2016
連句部門受賞作品　歌仙三巻

■文部科学大臣賞
歌仙「星宿を」　鈴木了斎　捌

星宿を映し地上の花の布置　了斎
　春の匂を愛づる曙　アンズ
弥生尽筆の運びもはかどりて　久美子
　洗濯物の山の減りゆく　曜子
男の子去つて残つた皿の数　久子
　涼風を受けランナーの月　文子
ウ
初蜩聞けば湧きくる旅心　文
　梅干の核割つて占ふ　ア
強引な誘ひに乗つてみようかな　美
　ファーストキスはとうに忘れた　仝
ドーベルマンお手をするときちよつと照れ　ア
　色葉ちらほら散つた芝草　斎
遠来の友の酔ひ伏す月の庵　美
　きちきち飛蝗飛びついてくる　久
襞多き服にアイロン難渋し　文
　季節のサラダ野菜いろいろ　曜
新築の家に贈らん桜桃（ゆすらうめ）　ア
　朝寝の夢の終るのはいつ　美
ナオ
山頭火追うて雲追ふ斑雪山　久
　梵妻さんはもんぺ銘仙　文
ありがたうこんにちはだけフランス語　ア
　新型ロボットいまひとつなり　斎
生みの親天馬博士は群馬の出　ア
広い背中にかぢり付きたい　美
重なつて時間が止まる蒲団部屋　斎
　絵屏風の絵はどれもあぶな絵　ア
鑑定士常に口元覆ひつつ　文
　形あるもの壊るるといふ　美
木魚打つ桴（ばち）に月影射し入りて　曜
　時に義太夫うなる秋寒　文
ナウ
蓮の実の飛んでは沈む水の底　美
　宅配便を運ぶドローン　ア
世渡りはスルースルーで逃げ切つて　美
　裏金出せば今日も安心　曜
古書店にのらくろのゐる花の昼　久
　はしやぐ赤子の声のあたたか　仝

連衆　松島アンズ　副島久美子　前田曜子
　江下久子　橘　文子

平成二十八年四月一日　首尾
於　神代植物公園

考えてみれば、連句のように複雑微妙なものが、人の努力だけでそううまく出来るわけがない。むろん努力はするが、その上で何か、人の意図や努力を超えた力の働きが必要だと思う。だから、年に一、二巻、まあなんとかと思える程度の作品が出来れば御の字だと思うし、まして賞など、狙っていただけるものではない。

連句を習い始めて数年で、恩師と仰ぐ三人の方が次々に他界された。それ以来、切磋琢磨しながら連句のための努力を共にしてきた人も、既に此の世にいない。今回の受賞作品のご連衆の一人も、その月のうちに亡くなられてしまった。此の世の努力だけではどうにもならぬことにも、あちらの世界でお力添え下さる方が増えた。地上の生者はこれからもそのことを忘れずに、生者の努力を続けるしかない。（鈴木了斎）

■名古屋市長賞
歌仙「北斎の龍」　石川　葵　捌

蒼天を北斎の龍昇りけり　葵
　大地の恵み受けしものの芽　守枝
靴工房春のデザインとりどりに　藍
　ＦＭラヂオ音の程よく　葵
旅めきて片側町に月の影　枝
　一里さきより匂ふ木犀　藍
ウ
京劇の名優揃ふ秋舞台　葵
　駐車違反の切符切られて　枝
歯の痛む彼のもとへと今すぐに　藍
　君の笑顔は万病に効く　葵
海で逢ひ海で別るる淡き恋　枝
　線香花火ふつと落ちたり　藍
夏衣肩揚げを縫ふ母に月　葵
　長押の写真兵卒のまま　枝
ドローン飛ぶ人は賢くなつたのか　藍
　機密文書はシュレッダー行き　葵
神宿る大樹の桜ゆさゆさと　枝
　駒の孕めば遠きまなざし　藍
ナオ
朝寝してけふは何日何曜日　枝

下宿部屋には有象無象が　葵
芸術は爆発！　てふ書きなぐり　藍
正体かくす仮面妖しく　枝
札束でなびかぬ女ボブカット　葵
キスはディープに銃は冷たく　藍
雪暗の森の中なる線路跡　枝
大梟の守る縄張り　葵
祖父の注ぐ紅茶と祖母の焼くクッキー　藍
身の丈に合ふ暮らし安らか　枝
稿終ふる半月の透くあけぼのに　藍
研究室に満つる爽涼　葵
ナウ 三陸の腹太秋刀魚とれ始め　枝
観光バスで糶を見学　葵
名刺にはHAIKU　POETと記されて　藍
無明の酒に酔うてをります　葵
花衣たたむ袖より花弁落ち　枝
檳榔毛車にとまる蝶々　藍

連衆　谷本守枝　矢崎　藍

平成二十八年三月八日起首
同年四月十六日満尾　文音

白雪の富士を背景に、黒雲の中、龍が身をくねらせ天に昇る。「富士越龍図」北斎晩年の肉筆画です。この作品と出会ったのは、小布施の北斎館。最も絶筆に近い作品との説明を受けましたが、龍の両足は天を掴み、ぐいと自らの力で這い上るような迫力です。北斎は自分のエネルギー源として、身内に龍を飼っていたのではと想像を逞しくしました。私には龍を飼うことなど出来ませんが、せめてタツノオトシゴなりと飼ってみたいと思うこの頃です。（石川　葵）

■愛知県連句協会会長賞

歌仙「レントゲン」　石川　葵　捌

レントゲン素直に息を止める夏　葵
気が付けばけふ時の記念日　孝子
和太鼓の撥の捌きの軽やかに　葵
岬の洞に響く上げ潮　孝
光る澪残し彼方へ月の舟　葵
窓辺に飾るコスモスの壺　孝
ウ いそいそと秋袷出す母のゐて　葵
やや気の置ける家元の茶事　孝
持参金いくらかしらと噂され　葵
キスばら撒いて降りるタラップ　孝
主人待つ盲導犬はわき見せず　葵
寒月白く浴びる聖母子　孝
熱々の蕪のポトフに癒されて　葵
五体沈める革のスツール　孝
達筆の辞職届は引き出しに　葵
動く字典と綽名されける　孝
ニーチェ真似神の死告ぐる花の下　葵
ただかぎろひて原子炉は在り　孝
ナォ 壁掛けの農事暦の種おろし　仝
婆はネットで味噌漬を売る　葵
人情と少しの欲を天秤に　孝
妖狐も末は石となりゆく　葵
反魂香焚く翠帳に雪女郎　孝
市民大学講師ダンディー　葵
レポートのそれはさながらラヴレター　孝
駈け落ち先を示すカーナビ　葵
七十年戦後を遠き國に住み　孝
幸せ貯金ちやうど満期に　葵
名月の射し入る堂の般若経　孝
影は地に揺れ銀の穂薄　葵
ナウ 芸術祭コンセプトにはジャポニズム　孝
ラベルにSAKEと飾り文字書く　葵
伝説の店の主の髯も老い　孝
豆屋の軒に住み着いた鳩　葵
花の雨あした晴れれば叶ふ夢　孝
モーブカラーの春のスカート　執筆

連衆　坂本孝子

平成二十七年六月十四日　起首
同年八月二十六日　満尾　文音

「チャンスの神様には前髪しかない」この言葉をいつどこで聞いたか、はっきり覚えていませんが、今まで「さあ、どうしよう」と悩む節目ごとに、いつもこの言葉が背中を押してくれました。まだ連句を始めてうろうろしていた頃、孝子先生のお捌に偶然にも二度ご同座させて頂き、思い切って文音をお願いしました。今思えば随分唐突な、失礼なお願いでしたが、チャンスの神様の前髪を掴んだ瞬間でした。文音で巻いた歌仙は私の宝物です。（石川　葵）

事務局だより

●第二十六回猫蓑同人会総会が開催されました（前号既報）

六月十九日（日曜日）、新宿ワシントンホテル新館にて、第二十六回猫蓑同人会を開催しました。当日の歌仙六巻はｐ14～16に掲載。

●第百三十八回例会（平成二十八年度猫蓑会総会）が開催されました（前号既報）

七月二十八日（木曜日）江東区芭蕉記念館にて、猫蓑会総会を開催しました。議事ののち歌仙を実作しました。当日の歌仙八巻はｐ10～13に掲載。

●平成二十八年～二十九年度猫蓑会運営体制（総会にて承認）

会長　青木秀樹
副会長　鈴木了斎
理事（就任順）林　転石（会計）　武井雅子
佐々木有子（事務局）
鈴木千惠子（新任）
監事　吉田酔山　武井敦子
運営委員　鈴木美奈子　松原　昭　高塚　霞
事務局チーム　高塚　霞　武井敦子　江津ひろみ
顧問　東　郁子
同人会会長　坂本孝子

なお、運営委員は会の新プロジェクト実施等により理事会で検討の上適宜委嘱します。

●第百三十九回例会（芭蕉忌・明雅忌）が開催されました

十月十九日（水曜日）江東区芭蕉記念館にて、芭蕉忌正式俳諧興行の後、八卓に分かれて明雅忌追善源心を興行しました。当日の正式俳諧二十韻はｐ5に、源心八巻はｐ2～5に掲載。

●今後の予定

・第百四十回例会　平成二十九年初懐紙
一月二十二日（日曜日）
歌仙実作
於　ホテルグランドヒル市ヶ谷
十一時半受付開始　十二時開会

・第百四十一回例会　亀戸天神社藤祭興行
奉納正式俳諧　四月下旬
二十韻実作　於　亀戸天神社

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

基金口座　みずほ銀行新宿新都心支店
猫蓑基金　普通預金　３３７６０４５

●会員の受賞

・第31回国民文化祭あいち２０１６文芸祭連句大会
文部科学大臣賞
歌仙「星宿を」の巻　鈴木了斎　捌
名古屋市長賞
歌仙「北斎の龍」の巻　石川　葵　捌
愛知県連句協会会長賞
歌仙「レントゲン」の巻　石川　葵　捌

以上三作品は、ｐ18～19に掲載。

●各種募吟にふるってご応募下さい

今年前半の主な募吟

❶第21回えひめ俳口全国連句大会
応募締切一月三十一日　**歌仙**（今回のみ、**子規**、**漱石**、**極堂**いずれかの発句による**脇起歌仙**）

❷南砺市いなみ全国連句大会２０１７　応募締切三月十五日　**歌仙**

❸第32回国民文化祭・なら２０１７
応募締切四月十日　**二十韻**

❹埼玉県芸術文化祭２０１７・さきたま連句大会
応募締切六月三十日　**歌仙**

（応募締切順・詳細は事務局まで。右記募吟の審査員には各一名ずつ猫蓑会員が加わっています。）

●新会員

・武村利子　二十九年一月復帰

●訃報

・猫蓑会設立の功労者であられた杉内徒司丈が、昨二十八年二月にご逝去されました。享年九十八歳でした。つつしんでご冥福をお祈りいたします。

●『猫蓑通信』バックナンバーはすべて**http://www.neko-mino.org**にて閲覧、ダウンロードできます。

●今号は、諸般の事情により合併号となったことをお詫びいたします。

季刊　『猫蓑通信』第百五号・百六号合併号
平成二十九年一月十五日発行
猫蓑会刊
発行人　青木秀樹
〒１８２・０００３
東京都調布市若葉町２・２１・１６
編集人　鈴木了斎
印刷所　印刷クリエート株式会社